

報告

看護教員養成講習会を受講する中堅看護師に内在するニーズ

木村久恵^{1 §}, 村井嘉子¹, 中道淳子¹, 堅田智香子¹

概要

成人教育において教育プログラムを構築するにあたり、その対象者のニーズを診断することは重要な視点である。本研究の目的は、看護教員養成講習会受講者に内在するニーズを明らかにすることである。受講者 12 名を対象に面接調査を実施した。その結果、【環境を変えて看護について考えたい】【これからの方向性を決めたい】【与えられる仕事でなく自分で判断して仕事がしたい】というニーズが明らかになった。受講者は、看護専門職としての発達過程において障壁に遭遇し、現状における限界を克服するための方略を求めていると考えられた。

今後の看護教員養成講習会では、受講者のバックグラウンドや将来の進路を考慮に入れ、看護基礎教育と臨床看護を関連づけた教育プログラムが必要と考える。

キーワード 看護教員養成講習会, 成人教育, ニーズ, 中堅看護師

1. はじめに

看護基礎教育を担う者（以下、看護教員）の要件は、「看護師等養成所の運営に関する指定要領」で規定され、「専任教員として必要な研修」を修了することとなっている。しかし、これまで監督省庁が実施していた看護教員養成機関の閉校や講習会の縮小が生じ、かつ平成 23 年度以降、「専任教員として必要な研修」は地方分権型に移行しつつある。また、看護系大学が増加する現状にあっても、平成 23 年度に就業した看護師の約 7 割の看護師が看護師養成所を卒業している状況¹⁾からすれば、その教育を担う看護教員の使命は重大と考えられる。

A 公立大学では、A 県看護教育連絡協議会からの要請を受け、平成 23 年度より A 県委託事業として A 県看護教員養成講習会（以下、講習会）を開催することになった。8 ヶ月間の講習会の教育目的は、看護教育に必要な知識・技術を習得し、看護教員として創造的に活動し得る能力を啓発することである。講習会の対象となる者は、既に看護教員の役割を遂行しながらも研修を受講していない者、今後看護教員になる者、臨床で学生指導または看護継続教育（以下、継続教育）を担当する者である。また、看護教員は看護実務経験 3 年以上を有する者と記されているが、実際にはそれ以上の実務経験を有する中堅看護師以上の者が殆

どである。

平成 22 年度「保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律」の改正²⁾により、新人看護師に対して臨床研修が努力義務化された。臨床研修プログラムは、教育的視点をもって看護基礎教育（以下、基礎教育）との連続性を備えて発展させ、また新人看護師の特性を鑑みてメンタルヘルスにも配慮した内容と進捗で構築され、それを遂行することが期待される。これらの教育的な活動は、必然的に中堅看護師以上の者が担うこととなり、そのためのスキルを備えた指導者を育成するためにも本講習会の役割は、看護を取り巻く社会情勢と関連しながら拡大しつつあると考えられる。

講習会に関する先行研究をみると、教育内容、教育方法の検討を行った報告や、受講者の講習会受講前後における自己反省、自己洞察、教育への関心の増大などの広がりなどが報告されている^{3)~9)}。また、講習会終了後も看護教員として自己の模索を続け看護教員としての発達課題と向き合っていること¹⁰⁾、看護教員としての自己成長の特徴から講習会における教育的意義を明らかにしている¹¹⁾。

筆者らは、本講習会を成人教育として位置づけることに異論はないと考えている。マルカム・ノールズ (Knowles, M.S.)¹²⁾ は、成人教育とは、成熟した人間が一人、あるいは他者と共に新しい知識や理解、技能、態度、関心、価値観を得られ

¹ 石川県公立大学法人 石川県立看護大学

[§] 責任著者

るような経験を含む成人学習プロセスであるとしている。また、これは様々な機関や団体が成人教育の対象者の成長と発達のために行うものであり、これは生産的プロセスやサービス・プロセスと共に行われる教育的プロセスであることより、組織化された活動を意味する。これらのプロセスと活動は、社会的実践の領域に結びつけられ社会システムに関連づけられており、成人学習の方法と内容を改善しつつ、成人への学習機会を広げることで文化の一般的水準を高めるという目標に向かうと主張している。言い換えれば、成人学習者は、社会システムにある組織（職場）に帰属し、その組織で求められる事柄を達成することで仕事へのやり甲斐や組織への貢献を実感する。同時に成人学習者の活動により組織は社会的な役割・使命を果たすこととなり、それは地域・社会のニーズをも達成することになる。更に、地域社会のニーズが達成されることによって、その文化が発展的な成長を成すと考えられることより、成人教育について注視することは、古くもあり新しい課題と言える。

成人の多彩な生活実態を理解することは極めて困難である。そのため成人教育における目標設定、教育内容の構築のために、特に教育プログラムにおけるニーズの診断は重要な視点であることを指摘している¹³⁾。教育プログラムで提供する事柄、その根拠が確かであることが成人教育を成功へと導く事となり、教育プログラムのはじまりは、たとえ最終目標が組織や社会のニーズを満たすことにあっても、成人の関心＝自らの真のニーズに沿うことである。従って、成人教育（に関わる）者が、成人学習者の個人や組織、社会の教育的ニーズを診断することは重要なことである。

本講習会受講者個人の根底に内在するニーズを把握することは、基礎教育の高度化、看護師の役割拡大が主張される状況において、複雑な看護師養成教育を支える看護教員にとっての講習会の在り方を検討する上でも重要と考える。また、経験を重ね看護職として就業する過程で受講に至った者に内在するニーズを明らかにすることは、臨床や看護教育の現場で重要な役割を担う中堅看護師の成長を支援するための示唆を得ることにつながられると考える。

本研究は、講習会受講者に内在するニーズを明らかにし、今後の成人教育としての看護教員養成講習会の在り方について考察することを目的とする。

本研究における中堅看護師は、辻ら¹⁴⁾が定義する、臨床経験5～20年未満の時期にある看護師に準拠する。

2. 研究方法

2.1 研究デザイン

本研究では、講習会を受講する者の受講に対する思いや期待より講習会受講に対して内在するニーズを明らかにする。そのため、研究協力（対象）者の語りを解釈し、その意味を読み解く質的方法を用いた。

2.2 調査対象

平成23年度A県看護教員養成講習会を受講者した32名へ依頼し、そのうち、研究協力が得られた12名を対象とした。

2.3 調査方法と調査内容

平成23年10～12月に半構成的面接を実施した。実施は、講習会の教育カリキュラムがほぼ終了した教育実習終了以降とした。面接内容は、臨床経験、基礎教育経験、現在の職務内容、講習会を受講した動機、講習会に対する期待や思いとした。1回の面接時間は約50分とし、プライバシーが守られる個室で行った。面接内容は承諾を得てICレコーダーに録音した。

2.4 分析方法

面接内容より逐語録を作成した。対象者の語りの中の講習会に対する期待や思い、それに関連する特徴的な事柄を拾い上げる。過去から現在に至る経験、将来の自己を想像することとの関連について解釈する。中心となるテーマを抽出し、類似したテーマをまとめ名称をつけてカテゴリーとして分類し講習会に対するニーズとした。最後にカテゴリーの関連性について検討した。分析の全過程において研究者間で検討を行うことで結果の信頼性の確保に努めた。

2.5 倫理的配慮

本研究は、石川県立看護大学倫理審査の承認（看大第786号）を得て実施した。受講者用掲示板を活用し研究協力を募った。応募者へ研究の趣旨および倫理上の配慮について説明を行い、同意が得られた者のみ対象とした。説明の際、講習会の成績に関係しないことを口頭および文書で明確に伝えた。同意しなくても不利益を受けず、一旦同

意してもいつでも自分の意思により撤回することができること、記述したデータは個人が特定されないように取扱い本調査以外の目的では使用しないことを口頭および文書で説明した。

3. 結果

3.1 対象者の概要

年齢は29～45歳（平均35.3歳）、男性1名、女性11名、合計12名である。専修学校に所属する者9名、病院に勤務する者3名であった。臨床経験年数は、6～10年7名、11～20年3名、21年以上2名であった。その内、今回の講習会受講開始（4月より開始）までに基礎教育経験がない者3名、1年未満6名、1年1名、2年1名、6年1名であった。基礎教育経験1年未満の者は、新年度になって専修学校へ異動となった者であった。最終専門学歴は大学卒が5名であった（表1）。

表1 対象者の概要

対象	性別	所属	臨床経験年数	教育経験年数	最終学歴
A	女	専修学校	6	1年未満	大学
B	女	病院	6	0	専修学校
C	女	専修学校	7	6	大学
D	女	病院	10	0	専修学校
E	男	専修学校	10	1	専修学校
F	女	専修学校	15	1年未満	大学
G	女	専修学校	6	2	専修学校
H	女	専修学校	16	1年未満	専修学校
I	女	病院	12	0	専修学校
J	女	専修学校	10	1年未満	大学
K	女	専修学校	22	1年未満	大学
L	女	専修学校	22	1年未満	専修学校

3.2 受講者のニーズ

講習会受講者に内在するニーズが3つ抽出された。そのニーズは、【環境を変えて看護について考えたい】【これからの方向性を決めたい】【与えられる仕事でなく自分で判断して仕事がしたい】であった。以下に、それぞれのニーズについて詳述する。ニーズを【】、中心となるテーマを< >、対象の語りを「」、対象者の語りの意味を損なわないように研究者が補った部分を（）で示した。

(1) 【環境を変えて看護を考えたい】

受講者は、それぞれの職場における日々の職務に忙殺され看護の視点を見失いかけていた。そし

て、この現状から少し距離をおいた所でじっくりと看護や看護を取り巻く状況を見つめたいと考えて受講を決めていた。

このニーズは、<看護を極めたい><看護の視野を広めたい><看護の本質を考えたい><自分の経験を大切にしたい>という中心となるテーマで構成されていた。特徴的な語りの内容を取り上げ以下に示す。

F氏は、「私は、臨床で15年間働いた後半の7年間がIUCでした。急性期の重症の患者さんのケアをしつつも、新人看護師へ教える時に看護とは何か？今日あなたができる看護とは何か？と、話をする過程で自分でも看護とは何かと思う事があって、毎日業務に流されて過ぎてしまいゆっくり勉強したい、何か新しく環境を変えて勉強することで自分の看護を深めたいと思いました」と語っていた。また、I氏は、「（講習会で）何をどんなふうに勉強するのか、全然知らなかったけれども、臨床で何も知らずに教育をやっている、どんなふうにすればよいか、いろんな制約の中でやっていたらジレンマとかもあって、看護っていうものを立ち返るなり、深く考えてみたい。もう一回、（看護の）基礎を（講習会において）確認することもできる」と語っていた。

K氏は、「この8ヶ月は、人生の中で最後の研修になると思って前向きに取り組んでいきたい。30代後半で大学に編入学したのですが、今ここに来て、社会人学生が多いとうことを聞いて、（自分は）あの時そうだったと感じて、経験を積むことには重みがあると実感したので、だからこそもう一度、後悔がないようにやろうと思いました」と語っていた。

それぞれが自身の看護実践に対する何らかの思惑があり、中堅看護師として後輩への指導を通して更なる飛躍と学びを期待していたと言える。また、これまでの看護職としての軌跡を見つめ、この講習会を貴重な経験と位置づけていた。

(2) 【これからの方向性を決めたい】

受講者は、臨床あるいは教育経験が5年を過ぎた現時点において、それぞれの職場において否応なくこれまでとは異なる課題に取り組むことが期待されていた。しかし、自分だけで対応することに困難を感じそれを打開することを目指して、これからの自分の行動を模索し、進むべき方向性を確かめるために受講を決めていた。

このニーズは、＜教員として何ができるのか考えたい＞＜5年の臨床経験を経て課題を与えられるが、自分ではどうにもならない＞＜既習の知識を整理してこれからは繋げたい＞という中心となるテーマで構成されていた。特徴的な語りの内容を取り上げ以下に示す。

B氏は、「私は、臨床5年目なのに色々な委員を兼ね、病棟を引っ張って行く立場になることが多くて…、そういう中で働いて、何て言うか、ちょっと限界を感じたというか、一生懸命にこれも、あれも勉強しなければと思っています。(中略)他の病院で教育をどうしているか、こんなことで困っているけど、どうしているか、色々、聞きたかったです。私の周りでもずっと看護師を続けるのが難しくて辞める人たちが多くて…。でも、私より年上の方で教育に携わっているということは、看護をやっていきいたい人が多いのかなあと思いました。これからどうやって看護師を続けられるのか、自分の中でもすごい葛藤があって、どうやってみんな看護師として生きているのか知りたくて…」と語り、状況対応に困惑する飽和状態に達していた。

C氏は、「FDや評価について学びたくて…。学校でも立ち上げて検討することもあります。どうしたらいいかが分からなくて…。(中略)職場でも意見交換していても、なかなか糸口が見えなくて困っています。職場で話していてもまとまらなくて…。」と語っていた。C氏は、専任教員として経験が豊富であるが教員として必要な研修を受ける機会を逸しており、ようやく本講習会を受講するための生活環境が整ったことによる参加であった。現在の職場における課題を少しでも解決の方向へ向かわすために、また、よりよい教育方法を探求することを希求していた。これまで基礎教育を担ってきた者として、これまでの教育実践を確認しながら、新たな教育方法を掴み取ろうとしていた。

(3) 【与えられる仕事でなく自分で判断して仕事がしたい】

受講者は、これまでの臨床や教育経験において試行錯誤を重ね、また先輩からの指導を受けながら役割を担っていた。役割遂行を積み重ねる過程において、実践への興味関心が高まると同時に新たな疑問を感じていた。自分とは異なる考え方に触れ、様々な方法を見聞きすることで、自分の力

で自分の考えた方法で実践を試み、評価していきたいと考えるようになり受講を決心していた。

このニーズは、＜自分の考える看護を学生に伝えたい＞＜ベテランの先生に近づきたい＞＜実践を評価する方法を考えたい＞＜自分の目標を明確にしたい＞＜基礎教育の学生を評価する手がかりが欲しい＞という中心となるテーマで構成されていた。特徴的な語りの内容を取り上げ以下に示す。

G氏は、「(教員)1年目の時にオリエンテーションは受けましたが、経験がないため結構手探り状態で、私が実習指導するのとベテランの先生がするのは視点が違うから差が出てしまい、学生に申し訳ないなあと…研修に行けば、ちょっとは(ベテランの先生と)同じ目線に立てるのかと思って…。」と語り、上司が学生へ関わった場面を取り上げて「一つの場面でも指導することがあるんだと思って、そのような見方が(自分には)なかったなあって思って、そういうところも学生に伝えられるように自分の視点を広げられたらいい」と語っていた。G氏は、試行錯誤の実践の中で上司が学生へ指導する場面より、自分との考え方や対応の違いを実感することで、自己の不足を補い自己成長することを期待していた。J氏は、「(略)師長さんや主任さんから(あなたの)学んだことを人に伝えてこそ、あなたの学びが本物、意味があると言われて。これからの看護師人生を考えた場合、私は、スペシャリスト系でなくジェネラリストを目指していましたが、何か目標をもってやらないともったいないと言われ、やってみようと思いました」と語り、自分自身の学びを更に拡大するという目標を描き始めていた。

L氏は、「やっぱり学生理解というか、指導していてもその場、その場の学生の一面しか見られず、トータルで成長が見られない。臨床指導をしていても、日替わりで担当していて学生の成長が見え難い。学生を評価する時もしっかりした評価ができる、学生をしっかり見ることを学びたいと思いました」と語っていた。

いずれの対象者も本講習を受講することは、新たな取り組みにチャレンジすることであり、看護専門職としての自律を図ろうとしていた。

講習会受講者に内在する3つのニーズは、以下のように関連づけられる。対象者は、臨床または教育経験が豊富な中堅看護師であった。中堅看護師は、これまでの経験の積み重ねにより一通りの仕事が可能になるが、同時に新たな課題に直面し

その課題への対応を期待される。彼らは懸命にその課題に取り組みながらも、その方法が見出せず苦悩する状況にあった。そこで【環境を変えて看護について考えたい】、講習会を受講することを契機に【これからの方向性を決めたい】、そして看護職としての学びを深めることによって自己成長を図り【与えられる仕事でなく自分で判断して仕事がしたい】と考えていた。

4. 考察

4.1 受講者のニーズの特徴

講習会受講者に内在するニーズとそれらの関連性を明らかにした。殆どの対象者が本講習会を受講するに至った背景には、職場からの要請や勧めがあった。しかし、講習会の開始と同時に受講者自身の学ぶ意欲が強まり、学ぶことへの喜びを実感したことを語っていた。受講者は、臨床看護や基礎教育のいずれの環境にあっても、これまで以上に積極的に患者や学生と関わっていききたい、継続教育や基礎教育の実際、またその意味について考えたい等、看護(学)への探求心を高めていたと考えられる。

対象となった受講者は、中堅看護師層に相当する。中堅看護師の存在は、看護の質を左右し、看護師の育成や職場の環境作りに影響を及ぼす存在であると言われている^{15) 16)}。一方で、専門職としての自律性の低下、状況判断し変化に対応する能力の低下が指摘されている^{17) 18)}。一定の職場において5年の経験を積み重ねることは、仕事への熟達であるばかりでなく仕事への慣れが生じることが考えられる。看護を取り巻く社会情勢の中で臨床看護や基礎教育への期待も変化する背景において中堅以上の看護師は、それぞれの職場において役割変化が生じ、それを担い状況の変化に追従していくことが求められる。しかしながら、それぞれの職場における5～7年以降の役割変化を期待されることへの困難感が生じたり、今後のキャリアアップにおける方向性を模索していると考えられる。つまり、看護専門職としての発達過程において障壁に遭遇していることが考えられ、現状における限界を克服するための方略を求めていると考えられた。

また、現在の医療を取り巻く状況において臨床看護が時間のゆとりを許さない状況を作り上げ、対象者は看護の本質を見失いかけている状況を感じていた。看護体制が7対1となって、どのように看護実践は変化したのであろうか。看護実践

の充実は患者と向き合うことのみでなく、臨床現場でしかできない人材教育を含めた解釈が必要なのではないだろうか。チームで行う看護は、一人の優秀な看護師だけでなく新人看護師を含め看護全体の底上げによって看護は変化することになるだろう。どのような看護を提供したいのか、しなければならないのか、そのためにどのような人材を育てていきたいのか、基礎教育を担う教員と臨床指導者による意見交換が必要である。さらに、その意見交換の場では、双方の具体的な行動計画を明らかにすることが重要ではないだろうか。

女性のライフサイクルの中で一旦職場や家庭を離れて、タイミングよく専任教員に必要な講習会を受講できるとは限らず、状況を優先しつつ講習会を受講することを先延ばしになることも少なくない。その間、上司や先輩からの指導を受けることで役割を遂行しながらも、自身の課題を意識するようになっていた。臨床看護では、実習指導における学生との関わりや新人看護師教育など、最初は上司から指示された事柄であっても実施後の責任や評価について求められることで、仕事のやり甲斐を感じると同時に、これまで以上の仕事を達成するための裏付けとなる学問的基盤が不足していることに苦慮していたと考えられる。

中堅看護師の世代は、ジェネラリストとしての能力が飽和状態にあることが指摘されている¹⁹⁾。昨今、中堅看護師が専門看護師や認定看護師を目指す傾向にある中で、中堅看護師は専門職としての道を選択するのかを考える時期でもある。中堅看護師のやり甲斐を支え更なる成長を促進するためには、達成可能なハードルを提示しながら難題を克服できるように支援することである。本講習会において看護観の再構築、同様の悩みや目的をもった仲間と語るとは、難題に立ち向かうための源になったと推測する。看護管理者は、中堅看護師に対して将来の方向性を見極めるためのアドバイスをすることも必要であろう。

4.2 成人教育としての講習会の在り方

受講者らは、講習会において日常の看護実践の行為について意識的な振り返りをしていた。そして、看護であることの意味を問い、課題解決の方法を探り、更なる看護実践の進化のための教育方法を創造していたと推察する。また、豊富な看護実践があるにも関わらずその内容を吟味できず放置していることが少なくないことが分かった。講習会の仲間同士では看護について語ることが可能

であるにもかかわらず、何故、職場ではそれができないのか。講習会では、この課題を解決へ導くことができる人材を育成しなければならない。成人教育は、経験の貯えを蓄積するようになり、それは他者との交流によって豊かな学習資源となること、またそのプロセスは、生活上の可能性を充分開くような力を高めていく特徴がある²⁰⁾。従って、講習会では看護実践（臨床場面あるいは教育場面）の事例の振り返りを丁寧に行うことを通して、看護実践の根拠と意味を明らかにすること、また、それぞれの看護実践に対する肯定的なフィードバック、加えて、その実践における欠けたる部分を明確化することができるような教育プログラムの提供が必要である。それによって、受講者が望んでいた看護専門職としての自律性を高めていくことに繋がると考えられる。

講習会は、専任教員になるための研修として位置づけられており、ガイドラインに沿った教育が指示されている。しかし、講習会を単に専任教員になるための研修ではなく、基礎教育と臨床看護を関連づける教育とする視点も必要ではないだろうか。今回も研究協力者の半数以上が新年度の人事異動で専任教員をスタートした者であり、その半数に当たる者が臨床現場に所属していた。受講者のバックグラウンドや将来の進路を考慮に入れ、基礎教育と臨床看護それぞれの立場から事例を取り上げてディスカッションするといった演習を通して両者の理解を深め、教育の在り方を検討できる教育プログラムも必要と考える。

看護職を継続する限りにおいて、看護専門職として自己研鑽し続ける力、講習会受講後のフォローアップのために、受講者自らが集い学習する力を持ち続ける事に繋がる企画が必要であろう。その力を装備することによって彼らの周囲の人々へ肯定的な影響を与えることになると考える。

5. 本研究の課題と限界

本研究において、対象者を中堅看護師と表現することに意見が分かれることが予測される。しかし、対象者はそれぞれの職場において肯定的な影響と改革が期待されるという意味においては重要な存在であると考えている。また、対象者は講習会受講時に病院勤務または専修学校勤務であったが、そのいずれかによる内在するニーズの違いについては今後の検討が必要である。

6. 結論

看護教員養成講習会を受講する中堅看護師に内在するニーズが明らかになった。対象者はこれまでの経験の積み重ねにより一通りの仕事が可能になるが、同時に新たな課題に直面しその課題への対応を期待される。彼らは懸命にその課題に取り組みながらも、その方法が見出せず苦悩する状況にあった。そこで【環境を変えて看護について考えたい】、講習会を受講することを契機に【これからの方向性を決めたい】、そして学び深めることによって自己成長を図り【与えられる仕事でなく自分で判断して仕事がしたい】と考えていた。

成人教育としての看護教員養成講習会は、基礎教育と臨床看護を関連づけた教育プログラムが必要と考える。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。なお、本研究は、平成23年度学内共同研究費の研究助成を受けて実施したものである。

利益相反状態の開示

利益相反なし。

引用文献

- 1) 日本看護協会出版会：平成23年看護関係統計資料集。日本看護協会出版会，東京，2012。
- 2) 保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律の一部を改正する法律，
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/attach/1282565.htm
- 3) 佐藤みつ子：看護教員養成に関する教育内容の研究。看護教育，26(3)，151-164，1985。
- 4) 前隆代，箕浦とき子，他：看護教育学科（看護教員養成教育）卒業生の動向（第2報）。神奈川県立看護大学校紀要，12，12-35，1989。
- 5) 大石喜久代：受講者の立場で考えられた指導体制 静岡県の実践。看護教育，35(5)，356-361，1994。
- 6) 佐藤みつ子，木下静香，他：看護教員養成講座修了者の研修内容に対する認識とその要因。東京都立医療技術短期大学紀要，9，169-179，1996。
- 7) 富田幸江，徳本弘子：看護教員養成講習会受講前後の看護教育に対する認識の変化（その1）－イメージマップからの分析を通じた講習会プログラム評価の試み－。日本看護科学学会学術集会講演集，20号，263，2000。
- 8) 富田幸江，徳本弘子：看護教員養成講習会前後の看護

- 護教育に対する認識の変化（その2）－受講者が学んだ教育内容－. 日本看護学教育学会 11 回学術集会講演集, 200, 2002.
- 9) 徳本弘子, 冨田幸江: 看護教員養成講習会前後の看護教育に対する認識の変化（その3）, －イメージマップによる講習生の自己評価からみた教育評価－. 日本看護学教育学会 11 回学術集会講演集, 201, 2002.
- 10) 坪倉繁美, 和賀徳子: 看護教師の成長に影響する因子－変容の契機についてのインタビューの分析－. 日本看護科学学会学術集会講演集, 20, 264, 2000.
- 11) 山田千春: 「看護教員としての自己」の様相に見る看護教員養成講習会の教育的意義. 日本看護研究学会誌, 34, 85-95, 2011.
- 12) マルカム・ノールズ著/堀薫夫, 三輪建二監訳: 成人教育の現代的実践 ベタゴジーからアンドゴラジーへ. 鳳書房, 8-10, 2002.
- 13) 前掲¹²⁾ p95-96
- 14) 辻ちえ, 小笠原知枝, 竹田千佐子, 他: 中堅看護師の看護実践能力の発達過程におけるプラトー現象とその要因. 日本看護研究学会雑誌, 30 (5), 31-38, 2007
- 15) 相場一二三: 中堅看護婦の潜在能力を引き出す研修－研修のプロセスを重視した病棟間留学の導入. 看護管理, 11 (12), 980-984, 2001.
- 16) 土佐千栄子, 出口昌子, 上野貴子, 他: 経験3年以上の看護婦・看護師の臨床実践能力の特徴第1報－3病院574名の看護婦・看護師を対象に－. 日本看護管理学会誌, 5 (2), 55-63, 2002.
- 17) 菊池昭江, 原田唯司: 看護の専門職自律性の測定に関する一研究. 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇), 47, 241-254, 1997.
- 18) 上野貴子, 内藤理英, 出口昌子, 他: 経験3目以上の看護婦・看護師の臨床実践能力の特徴 第2報－年齢階級別にみた臨床実践能力の比較－. 日本看護管理学会誌, 5 (2), 64-70, 2002.
- 19) 前掲¹⁷⁾
- 20) 前掲¹²⁾ p39

Needs of Mid-career Nurses Attending Nursing Teacher-Training Programs

Hisae KIMURA, Yoshiko MURAI, Junko NAKAMICHI, Chikako KATATA

Abstract

In adult education, to develop a training program, it is very important to identify the needs of the target population. This study aimed to clarify the perceived needs of individuals attending a nursing teacher-training program. A total of 12 participants agreed to undergo interview surveys. The survey results revealed that the following needs were considered to be priorities: "wanting to think about nursing in a different environment," "wanting to decide future direction," and "wanting to make decisions by themselves." Participants reported that they confronted obstacles in the nursing profession and sought methods to break free from existing limitations to career development.

In future teacher-training programs for nurses, the background and future career aspirations of those attending such programs should be taken into consideration. In addition, a training program that envisions real-life situations and links basic nursing education with clinical nursing is essential.

Keywords nursing teacher training program, adult education, needs, mid-career nurses